

# 京城帝国大学の内モンゴル調査

—1938年調査団の派遣背景をめぐって—

辻 大和

## はじめに

本論は1938年に実施された「京城帝国大学蒙疆學術探検隊」に関し、どのような背景があって派遣されたか?ということを探究するものである。植民地朝鮮の京城にあった京城帝国大学は、1938年から1945年までのあいだに全4回、「蒙疆」（現在の中国内モンゴル自治区中央部（旧察哈爾省および旧綏遠省）および山西省北部を合わせた地域を日本軍が占領し、傀儡政権を樹立していた）に學術調査団を派遣した。京城帝国大学は1924年に植民地朝鮮にはじめて設立された大学であっただけでなく、帝国大学としての大規模な陣容を誇っており、近年その大学史について研究蓄積が見られる<sup>1</sup>。その大学が、日本軍が1937年に占領したばかりの内モンゴル中央部、山西省北部になぜ調査団を派遣したのか、その背景を探ろうとするものである。

まず関連する先行研究を、1930年代の内モンゴルに関する研究、京城帝国大学の探検史、に二分して整理してみたい。

1930年代の内モンゴル研究については、（1937年に「蒙疆」の一部となった）中央内モンゴルについて内田・柴田（2007）が1937年の日本軍占領から敗戦までを俯瞰しており、中国では中央档案馆ほか（2004）が「蒙疆」政権通史を記述している。また（1932年に「満洲国」の一部となった）東部内モンゴルについては、広川（2005）が「満洲国」蒙政部の土地政

策について、鈴木（2012）が明治以来の日本の関与政策について明らかにしており、日本の対内モンゴル占領政策が次第に明らかになってきている。一方で当時の内モンゴルと日本勢力圏内の各地、とりわけ朝鮮との関係の研究はこれからの課題であるといえる。

次に京城帝国大学の探検史を見ていきたい。全京秀（2010）は戦前日本の軍学複合の事例として京城帝国大学の探検を取り上げた。また中生（2016）は植民地、占領地全体に関する日本人類学の調査史を時系列的に深掘りし、内モンゴルでの調査も扱った。これらの研究は関連する資料状況を明らかにし、京城帝大の研究者によるオロチョン族調査と、関東軍の諜報計画との関係など、特に学術調査に秘められた軍事的目的の一端を明らかにした。そうした流れとは異なって、永島（2019）のように京城帝国大学大陸資源科学研究所が設立される過程における、満蒙学術探検の人的結合、とりわけ京城帝大山岳部に注目した研究もある。その中心人物である、京城帝大出身の泉靖一（1915～1970年、文化人類学者）は戦後日本の文化人類学を牽引した人物であり、その多面性が明らかになってきたといえる。なお京都帝国大出身の今西錦司（1902～1992年、生態学者）、梅棹忠夫（1920～2010年、文化人類学者）らも1940年代に「蒙疆」張家口に設置された西北研究所での勤務経験を有しており（梅棹1991、中生2016）、戦後のフィールド研究にモンゴル体験が影響した可能性がある。

以上の整理でも、京城帝大の調査団が1938年7月、占領間もない「蒙疆」になぜ行ったのか？ ということについては明らかにならない。そこで本論では新出資料を用いて、彼らの協力機関や資金源に着目して派遣の背景を考察する。より具体的には、各種公刊資料のほか、近年利用可能になった朝鮮刊行の新聞縮刷版、外務省外交史料館にあり、国立公文書館アジア歴史資料センターで公開された報告書、国立民族学博物館の泉靖一アーカイブ中の個人資料などを用いる。こうして派遣の背景の一端を明らかにしたいと思う。

## 1 資料の状況について

ここではこの研究で用いる資料の性格について論じたい。公刊資料、未

公刊資料に分けて論じることにする。

## 1.1 公刊資料

京城帝国大学蒙疆学術探検隊の研究成果は、1939年に『蒙疆の自然と文化』として古今書院から刊行されており、準備状況の概要や、地図など多くの情報が得られる。しかし現地に住屯する日本軍の機関名や部隊名、具体的な助成内容についての言及は少ない。軍機関係であるとして自主的に執筆しなかったか、検閲を受けたものとみられる。

またこの学術調査の内容は『大阪毎日新聞』朝鮮版に、出発前から帰城後まで逐次報道されており、その内容を現在、復刻版などから利用することができる。なお朝鮮総督府の機関紙であった『京城日報』などにも関係記事が載っているほか、調査団の竹中要（当時京城帝大予科教授。1903～1966年）が、京城刊行の日本語雑誌『朝鮮及満洲』に学術調査の予備調査（1938年3月～4月）のようすを寄稿している。さらに、日本山岳会の機関誌『山岳』にも調査翌年に竹中要が小五台山登攀の記録を寄稿している<sup>2</sup>。こうしたマスメディア情報は公的な補助情報（特に大阪毎日新聞からのサポート状況）を知ることができるという利点があるが、政府や軍からのサポートについては言及が少ない。

## 1.2 未公刊資料

### ①外務省外交史料館

未公刊であったが、昨今、簡単にアクセスできるようになったのが、外務省外交史料館所蔵の「対支文化事業関係資料」である。国立公文書館アジア歴史資料センターのデータベースに収録されており、ウェブ上でアクセスすることができる。京城帝大調査団の資料がなぜ「対支文化事業関係資料」に含まれるのかについては後述する。調査団の関係資料は簿冊『本邦人満支視察旅行関係雑件/補助実施関係 第九巻』<sup>3</sup>に入っており、件名として「10.京城帝大教授 尾高朝雄外十一名 昭和十三年六月」に含まれている。この資料群は1938年夏の京城帝国大学蒙疆学術探検隊への補助申請書、報告書であり、各種関係機関、軍部隊の名前が明記されており、公刊資料では知りえない情報を知ることができる。

## ②国立民族学博物館泉靖一アーカイブ

このアーカイブは泉靖一の個人資料が国立民族学博物館に譲渡されたものである。そのなかには泉が参加した、1937～1945年にかけて行った満洲、内モンゴル、ニューギニア調査時のフィールドノート、カードが含まれる。そのうち今回注目するのは1938年のフィールドノートである。

このフィールドノートの内容は次の点から、当時作成された真のフィールドノートであり、泉靖一個人の所蔵品であると考えられる。

第一に、一部のフィールドノートの内容がこれまでに公表されていることである。戦前には1937年に泉が中国南部を旅行したときの紀行文が『朝鮮及満洲』にすでに掲載されており<sup>4</sup>、「江南の旅日記」とは一字一句一致はしないが、日程と訪問先など内容は一致する。そして戦後になって自身が自伝で『江南の旅日記』の一部を引用したほか<sup>5</sup>、泉家から借用して藤本(1994)が『江南の旅日記』の一部文章を引用した。さらに国立民族学博物館が泉靖一特集を組んだ『季刊民族学』154号(2015年)に『江南の旅日記』全文が翻刻され、そのほかのカードの写真が掲載された。この特集の時点では遺族の泉拓良氏の所蔵であると明記されており<sup>6</sup>、2015年から2019年の間に国立民族学博物館の所蔵となったと考えられる。

泉靖一フィールドカードが真に1930年代に泉によって作成されたとして、それがどうやって日本にもたらされたのか、伝来経路についても考えておきたい。というのも、1945年9月以降に日本人が朝鮮から日本本土に引き揚げた場合、通例では資料をほとんど持ち出せなかったからである。泉靖一と同じ京城帝国大学に勤めていた、言語学者の河野六郎<sup>7</sup>、歴史学者の末松保和<sup>8</sup>は、9月以降に朝鮮から日本に引き揚げたが、学術的な二次資料を含む個人蔵品をほとんど日本に持ち帰ることができなかった。

それとは対照的に、京城から資料を持ち出すことに成功したケースも存在する。第一に挙げられるのは京城帝国大学医療班である。京城帝国大学医療班は同大医学部の学生、教員を中心に結成された邦人向け医療支援組織であり、列車によって京城から釜山の間を往来していた。そして彼らは1945年9月以降に京城から東京に、京城帝大法文学部と理工学部の日本人の分の学籍簿写しを持ち出した。次の史料を見てみよう。

残務整理事務所では最小限の書類や資料で、引揚げ者の身分確認や今後の連絡や到着先の調査に大童であった。学務班の城大の世話の前記木島秀子さんに、鈴木治久君（旧姓島崎・法15）が、履歴書を調査したり、照合したりして、卒業生の消息を調査していた。その時、思いもかけない貴重な資料が持帰られていることがわかった。それは法文学部学生の学籍簿と、理工学部学生の学籍簿の写しであった。この学籍簿は終戦の混乱のさ中で城大の卒業生、在学生の日本人の分を引抜いて筆写して持ち帰ったのであった。量的には大型リュックサック一袋はあろうと思われる学籍簿を医学部引揚医療班が、引揚荷物の中に加えたり、各自の荷物に分割したりしての苦心の輸送であった<sup>9</sup>。

これによると、医療班が引き揚げ荷物に加えたり、分割したりして京成帝大法文学部と理工学部の学籍簿の写しを日本に持ち帰ったのだという。この資料は準公的資料といえるが、個人資料を密輸したことを告白した日本人もいる。朝鮮総督府鉄道局勤務で写真家の飯山達雄（1904～1993年）である。飯山達雄は朝鮮人医師の協力を得、「博多の韓国人引揚援護会宛の荷札をつけて」釜山から写真フィルムを密輸し、自身も密航したのだという<sup>10</sup>。

泉靖一は以上の京成帝国大学医療班および飯山達雄と密接な関係があり、同時期の行動は似たようなものである。泉は京成帝大医学部による移動医療局、ついで福岡で在外同胞援護会救療部の活動に加わり、1946年にソウルに密航したことを後に回想している<sup>11</sup>。

以上のことを踏まえると、泉靖一が1945年秋以降、日朝間の往来の過程でフィールドノート類を持ち出した可能性があるといえるのではないだろうか<sup>12</sup>。

ここで指摘しておかねばならないのは、引き揚げ当時、本来フィールドノートの持ち出しは合法でなかったことである。泉が研究データを新生ソウル大学に引き継がず<sup>13</sup>、個人蔵としたことは今から見れば問題である。泉は1949年2月には早くも東大・人類学教室の第4回民族学研究懇談会で、（戦争中1943年に自身が調査を行った）ニューギニアの「サゴ椰子文化に

ついて」を公表し、ほかにも原稿を公表している。韓国の文化人類学者である全京秀は、ニューギニア調査の成果発表に際して泉が研究データの由来を明示しなかったことを批判している<sup>14</sup>。

以上のことを整理すると、蒙疆學術探検隊の公式報告書以外に、朝鮮発行新聞の復刻版のほか、対支文化事業向け報告書（外交史料館所蔵）、泉靖一アーカイブ（民博）が利用可能になり、調査団の準備状況、各種団体からのサポート状況を追跡しやすくなった。一方で、研究データの持ち出しが合法でなかったことに注意が必要である。

## 2 1938年の内モンゴル調査のおかれた状況

### 2.1 「蒙疆」の占領状況

ここでは、京城帝国大学の調査団が調査活動を行った「蒙疆」の1938年の状況について、内田・柴田（2007）にしたがって整理してみたい。1937年7月の盧溝橋事件後、関東軍は東条英機参謀長のもと、多倫方面から草原地帯を西進する方策を選んだ。その結果、関東軍は内モンゴルの高原地帯に高速で侵入し、1937年8月27日には張家口を関東軍が占領することとなった。軍は直ちに活発な工作を開始し、察南自治政府を樹立させた（この場合の「自治」は中華民国に対する「自治」を意図している）。そして10月15日、晋北自治政府を樹立させ、10月27日には蒙古聯盟自治政府を樹立、11月22日には3自治政府を統合する蒙疆連合委員会が組織された。これらが現地における初期の傀儡政権である。

一方、日本軍では北支軍と関東軍の管轄の問題から、1937年12月28日、関東軍から分離して駐蒙兵団が編成され、兵団司令官は蓮沼蕃中将となり、その司令部要員の大部分は関東軍から転補された。

現地で情報活動、工作活動を行う特務機関の動きについても見ておきたい。1934年8月1日設置の張家口特務機関は占領前から情報収集に努め、占領後も行政の中心的な役割を担っていた。しかし1939年3月に「蒙疆」占領地は興亜院蒙疆連絡部の管轄下に置かれ、この連絡部設置に伴い、占領後に日本側の占領行政を担当してきた張家口特務機関が廃止された<sup>15</sup>。

## 2.2 経緯

次に京城帝国大学隊の推移について概観したい。「京城帝国大学蒙疆學術探検隊行程略誌」より抜粋すると<sup>16</sup>、1938年3月23日に竹中要教授が泉靖一助手を伴い先遣隊となり、張家口に向かい、張家口にて現地当局と連絡を遂げ、更に蔚県に到り、4月9日帰城した。本隊は6月7日に京城府南米倉町京城倶楽部において探検隊結団式を行い、7月7日に装備品及び食糧品の荷造りを完了し張家口に向け発送した。そして7月9日に隊員泉靖一・服部敏の兩名が先発隊として京城を出発し、7月21日に本隊が京城を出発し、24日北京に到着、朝鮮総督府出張所、大阪毎日新聞社支局等を訪問している。7月25日には本隊が張家口に到着し、先発隊と合流した。

「蒙疆」到着後は7月30日の午前中に二隊に分れて徳化付近の調査を行い、正午出、西蘇尼特（現内モンゴル自治区シリングル盟ソニド左旗）に到着した。7月31日には西蘇尼特に滞在し、付近の調査を行った。8月1日には西蘇尼特を根拠地として三隊に分れ、動植物学・地理学班はホルトンスーム東北のウーランホショに、地質学班はロヒノールに、経済学班は王府買売家に赴き、それぞれ調査研究を行った。8月8日には阿巴嘎貝子廟（現内モンゴル自治区シリンホト市）を出発、西烏珠穆沁（現シリングル盟西ウヅムチン旗）に到着した。8月10日には西烏珠穆沁を出発し林西に到着し、8月12日に林西出発、トラックの車輪を没する泥濘を走破して烏丹城に到着した。8月13日に烏丹城出発、赤峰到着、8月15日に赤峰発、多倫着。8月17日に多倫出発、張家口に帰還し、8月25日に小五台山に登攀。9月4日に張家口発、9月5日本隊北京着、9月10日に本隊が京城に帰着した。以上のルートについては、「行程図」も参照されたい。

次にメンバー・組織についてみておきたい。（表1）によると調査団は複数の班に分かれ、経済学班（鈴木武雄班長）、動物学班（森為三班長）、登山班（竹中要班長）、植物学班（石戸谷勉班長）、地理学班（多田文男班長）、地質学班（波多江信広班長）、撮影主任、報道主任、医療班を置いていた。1944年以降、泉靖一らとともに内モンゴルで人類学的調査を行う、京城帝大医学部の今村豊らのグループはこの回には参加していないことに留意したい。

興味深いのは予算である。「対支文化事業報告書」にある収支報告によ

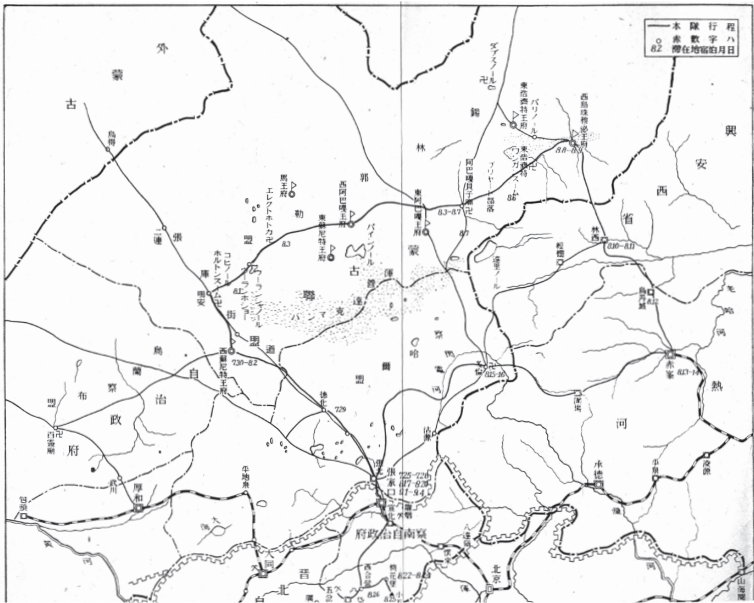


図 行程圖 京城帝国大学大陸文化研究会 (1939) より

ると、収入は(表2)の通りであり、予算総額12300円強で、うち京城帝大5000円、外務省文化事業部3000円、大阪毎日新聞1000円というのが目目を引く。外務省文化事業部と大阪毎日新聞との関係については後述する。

報告書によると、調査団は石膏、石炭の鉱脈発見、植物分布様相の調査、売買家による取引の動向調査といった方面で目覚ましい成果を上げ、その報告会は10月に京城で開かれ、500名もの聴衆を集め、総督や政務総監も来場するなど盛況に終わった<sup>17</sup>。

### 2.3 泉靖一のフィールドノートから

以上のような大規模な支援をみると、この調査団の準備は順調にいったように見える。しかし、尾高朝雄団長のもと、実質的に実務を取り仕切ったとみられる泉靖一のフィールドノートを見ると、必ずしもそうとはいえない可能性が浮き彫りになる。

泉靖一が先遣隊として張家口に到着後の、朝鮮総督府出張所との関係に



表1 蒙疆學術探検隊名簿

隊長	京城帝国大学教授	尾高朝雄
副隊長及経済学班長	京城帝国大学教授	鈴木武雄
動物学班長	京城帝国大学予科教授	森為三
登山班長	京城帝国大学予科教授	竹中要
植物学班長	京城帝国大学講師	石戸谷勉
地理学班長	京城帝国大学講師 東京帝国大学助教	多田文男
地質学班長	朝鮮総督府地質調査所技師	波多江信広
	水原高等農林学校助教授	斎藤孝蔵
撮影主任	朝鮮総督府鉄道局書記	飯山達雄
報道主任	大阪毎日新聞社特派員	羽間乙彦
	京城帝国大学助手	泉靖一
医療班（後半）	京城帝国大学助手	伊藤武男
	京城帝国大学副手	大西雅郎
医療班長（前半）	京城帝国大学副手	武藤明
	京城帝国大学予科動物学教室勤務	趙福成
	医学部学生	服部敏
	法文学部学生	藤原正義

表2 蒙疆學術探検隊の予算（単位は円、小数点以下は銭）

京城帝国大学研究会補助金	内訳		5000.00
	朝鮮総督府南次郎閣下寄付金	1000.00	
	朝鮮総督府外務部寄付金	500.00	
	朝鮮銀行寄付金	1000.00	
	朝鮮殖産銀行寄付金	1000.00	
	小林采男氏寄付金	1000.00	
	東洋拓殖株式会社寄付金	500.00	
外務省文化事業部補助金			3000.00
大阪毎日新聞社補助金			1000.00
隊員旅費負担金			2950.00
	朝鮮総督府鉄道局旅費（飯山）	850.00	
	大阪毎日新聞社旅費（羽間）	550.00	
	自然科学協会研究費（斎藤）	550.00	
	自然科学協会研究費（石戸谷）	500.00	
	自然科学協会研究費（趙）	500.00	
自然科学協会補助金 （寄生虫蒐集の為）			200.00
察南自治政府支出金 （施療薬品代トシテ）			130.00
金融組合預金利子			7.21
蒙疆銀行預金利子			13.58
収入合計			12300.79

「京城帝国大学蒙疆學術探検隊行程略誌」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015693800、  
本邦人満支視察旅行関係雑件／補助実施関係 第九巻(H-6-1-0-3\_2\_009)(外務省外交史料館)より

ついで言及した箇所の記事をみてみよう（原文の旧字体は新字体に改めた。「○は判読不明判箇所」以下同様）。

7月14日京城で見て来た8時30分張家口行の汽車は間違ひで、7時30分発なることを知つたのは遅かつた。まんまと汽車に遅れて11時30分の大同行に乗る。車中暑さはなはだし。南に八達嶺、昌平、○山そして大行山脈、涼風、空、驟雨、張家口に着いたのは午後6時40分。総督府の出張所から予め手配してあつた松田旅館に投宿、長田、金の二氏来訪。星野さんに電話したが通ぜないので、宿の男にいつてもらう。夕食後私達は三井洋行内の総督府出張所に赴き挨拶して出る。仕事の実際的な点においては何ら益するところなし、御好意はありがたし<sup>18</sup>。

これによると、泉らは総督府の出張所から旅館を手配してもらっているが、仕事の実際においては何ら益することがないと低評価をくだしている。

さらに興味深いのは、現地、駐蒙軍の一部参謀および特務機関から小五台山行に対する反対があつたことである。7月16日に泉靖一は駐蒙兵団を訪問し、交渉を行っている。

7月16日 1時察南政府に星野さんをお訪ねし、氏の案内で、竹内最高顧問にお会い申し、また監察官の鈴木氏、教育班の牧野氏にご挨拶してより、聯合委員会に赴き金井最高顧問にお会いして挨拶する。後室柳氏におめにかかる。それより特務機関の輔佐官をたづねる。昨日来たばかりではないかと先づやられて閉口する。併し実際横槍さえ入れなければ、兵力のないところ故、ただたのんで引き上げ、後機関長にお会いする。良い人である。それから常岡部隊を訪ね、参謀長に会い、半ば希望のあるやうな、ないやうな話を聞く。その話を総合してみると、大橋参謀が中に入って、此方の小五台山行の阻止を図つてゐるらしい。その意途は那邊にあるかは計りかねるが、先づ大した悪意から出てゐるのではないから、追々改善して行けるであらう。遅い書信をしたためて後満鉄に赴く。広瀬庶務主

任不在。宿に戻り、内蒙古を先にして小五台山行を保留することにする予定を立てその旨を打電。夕食後北京の総督府出張所と北京飯店気付尾高先生にサソリのワクチンに関する電報を打つ<sup>19</sup>。

泉は特務機関を訪ねているが、兵力のないところなので頼む程度にしており、常岡部隊を訪問して軍の動向を調べている。それによると、参謀長は希望のあるような、ないような話であり、大橋参謀が小五台山行の阻止を図っているという伝聞情報を得ている。泉が興味深いのは状況が不利とみるや、内蒙古を先にして、小五台山行を保留したことである。このことはその後、本隊が張家口到着後、内蒙古地帯での調査を先行させ、小五台山登攀を9月に延期したことと一致する。もっとも、書きぶりからすると泉にとっては小五台山への登攀が優先であり、モンゴル高原はそれほど重要でなかったようである。

一方で、駐蒙軍には宣撫活動として京城帝大隊の小五台山登攀の活用を考える将官がいた。それは張家口警備にあっていた独立混成第二旅団の常岡寛治少将である。

7月15日午前中は星野さんよりの連絡を宿で待つ。午後にはやうやく常岡中将との交渉が初つてゐるといふので、直に赴き、常岡閣下に面会する。閣下は先般まで此の計画の最大の反対者であつたが、最近蔚県、桃花堡、涿鹿視察後は、此の見解ががらつとかわって、住民に小五台山行の道路をつけさせ、我々の登るを待つて、僧侶百余名を以て廟の大法会を行ひ、蒋介石の鼻をあかさんと企途されたのであるが、最近は雨期に入つて増水はなはだしく化梢營の乾桑河にかかつた橋梁流出し、之に従つて共產匪の跳累が活発となつたため現下はもはや困難となつた。速に第二、第三案を立て、決定すべしとのことであつた。参謀に会つてもぜひたつてもといふならば何とかするが、長期滞在は困難とのことである。

辞して蓮沼兵団に赴き、大橋参謀にお会いし種々御相談する。氏の下にある山崎氏にもお会いする。参謀長は内地にお帰りになつてゐてお会い出来なかつた。取り合へず尾高先生に打電する<sup>20</sup>。

この資料によると、常岡は泉らの登攀することを待って大法会を行って宣撫工作に役立てる計画を立てたのだという。小五台山登攀を軍事的に利用とする将官がいたということであろう。こうした「蒙疆」の現地政権、現地部隊と調査関係者による折衝は、1938年にはじまる東方文化研究所（京都）の雲崗石窟悉皆調査でも見られ、長廣敏雄によると、第一次調査の立役者である水野精一は現地の日本軍司令部へ了解を取り付け、山西省大同の後宮部隊長以下特務機関に至るまでの将官、佐官のひとりひとりに調査の目的を説明し保護を求め、また晋北自治政府の応援を取り付けたのだという<sup>21</sup>。

以上、「蒙疆」地域の政治軍事的状況を振り返ったうえで、泉靖一のフィールドノートにみる現地特務機関、軍部隊との折衝過程を見てみた。その結果いえることとしては、1938年の上半期は、盧溝橋事件および張家口占領からまだ一年経っていない時期であり、現地軍部隊からみても泉靖一らの計画を積極的に後押しする人物と、後押ししない人物に分かれていたということであろう。特務機関側の事情はこれだけでは分からないが、軍の側に調査団を利用とする意図があったとはいえるであろう。

### 3 京城帝国大学内での派遣背景

次に調査団を派遣した側の事情を見てみたい。①漢薬研究、②満蒙文化研究、③山岳部の三つの流れにわけて考察する。

#### 3.1 漢薬研究

1920年代以降に東京帝国大学医学部（薬学）の慶松勝左衛門が「対支文化事業」の一環として漢薬研究を開始しており、慶松の弟子の杉原徳行（京城帝国大学医学部）が1930年に東方文化事業の助成を受け、南北満洲及び華北の漢薬を研究したことがあった<sup>22</sup>。

東方文化事業とは、1923年に定められた政府事業で、義和団事件の賠償金を財源とするものである。アメリカなどが賠償金を中国と外国の融和を図る事業に振り向けたことの影響を受け、日本は東方文化学院（東京・京都）、北京人文科学研究所、上海自然科学研究所などを設置していた。

北伐と1929年の済南事件で日中共同事業が不能になり、文化事業が変質したという<sup>23</sup>。

なお1931年以降、日本陸軍も京城帝国大学医学部の杉原らの漢薬研究に関心をもち、朝鮮軍の肝いりで京城帝大に生薬研究所が設置された。加来天民の回想によると、満洲事変を契機として日本の薬学でも薬物資源の確保上、洋薬代用の和漢薬の開発利用が重要な研究課題となり、某日、朝鮮軍軍医総監棍塚軍医少将（後関東軍軍医総監、軍医中將、終戦後永らくソ連に抑留）から朝鮮軍の医薬品確保の必要上、可及的速に洋薬代用の漢薬の研究実施を懇望され、軍としては戦火の拡大を察し関釜連絡船の遮断から来る医薬品の杜絶を懸念していた、というのである。加来によると、第二薬理学教室の建学の精神と、国家非常時の折柄、軍の希望を断る理由もなくその実行を受諾し、これを直ちに大学当局に伝え了解を求めた。速水総長はこれを快諾したが医学部の態度はなぜか曖昧であった。従って問題の緊急性と医学部の態度から計画は直接総長、軍医総監と筆者の間で進展した。応急の措置として医学部附属の開城薬草園が選ばれ、これを拡充して京城帝国大学生薬研究所となすことに決定したのだという<sup>24</sup>。

## 3.2 満蒙文化研究会

次に京城帝国大学内の大陸方面研究の流れ（満蒙文化研究会）を見ておきたい。京城帝国大学では、「満洲事変を契機に、大陸への関心が高まるとともに、満蒙文化の総合的な研究機関の設置の議がおき」、1933年6月に京城帝国大学法文学部・医学部の教官が中心となって満蒙文化研究会を設立し、部外の会社、銀行等をも賛助会員にしたという。そして学生の満洲視察旅行、医学部の間島への訪問診療のほか、学術講演会、パンフレット刊行などを行った<sup>25</sup>。なお1938年6月には満蒙文化研究会は大陸文化研究会と改組された<sup>26</sup>。

この関係で京城帝大教官が関係する研究題目について「満蒙文化事業」（東方文化事業が資金源）研究助成を受給するようになった（表3）。泉靖一は、1936年に指導教員であった秋葉隆の北部満洲でのオロチョン族調査に参加している<sup>27</sup>。満蒙文化研究会では医学部の今村豊が主要なメンバーであったとみられるが、前述のように今村は1938年夏の竹中らの蒙疆学術探

表3 東方文化事業による京城帝国大学教官への研究助成

代表者名	研究題目	年度
杉原徳行	支那の漢薬研究	1929
森為三	北満洲淡水魚及毛皮獣調査	1933-1935
赤松智城 秋葉隆	満蒙二雄ケル民俗及宗教ノ研究	1933-1937
大谷勝真	備辺司膳録中満蒙二関スル事項	1933-1937
森為三	満蒙淡水魚及毛皮獣調査	1936-1938
今村豊	満蒙支民族ノ体質人類学的研究	1938-1942

アジア歴史資料センター東方文化事業関係資料で確認できるもの

検隊には加わらなかった。今村は外務省からの研究補助金を受けた5か年計画の第一回として大陸人種雑質人類学調査班を組織し、当時の「満洲国」チチハル、ホロンバイル、ハイラル等に居住するバルガ、ブリヤート、ダホール、ソロン族の調査に同年7月から出発していた<sup>28</sup>。

### 3.3 山岳部

調査団では竹中要や泉靖一ら主要メンバーが山岳部員であり、予備調査でも小五台山を目的としていたことから、この調査団の中核に山岳部があり、結合の要となったことは間違いない。この調査団における山岳部の重要性は永島（2019）がすでに指摘しているが<sup>29</sup>、簡単に経緯を整理しておきたい。

京城帝国大学山岳部は、1933年秋に竹中要予科教授を会長、中村両造医学部教授を顧問に発足し、登山担当が泉であった。その後朝鮮各地で縦走、登攀、スキーツアーを年数回行っていた<sup>30</sup>。

なお登山から人類学研究に入った例としてはほかに京都帝大の今西錦司、梅棹忠夫らがあり、日本独特の現象であるという<sup>31</sup>。

山岳部が朝鮮外に活動領域を広げたのは、飯山達雄は、彼が1933年に朝鮮総督府鉄道局から新京出張に際して内蒙の登山に関し、山の友人竹中要に偵察を約束したことにはじまるというが<sup>32</sup>、実際には1935年に朝鮮北部、赴戦高原で京城帝国大学山岳部が合宿を行った際に、竹中要が泉靖一らに五台山登山を提議し、京城帰着後に小五台山登攀計画に発展した<sup>33</sup>というのが、真相に近いようだ。

その後1935年終りに小五台山および五台山遠征に関する第一回の問い

合わせが天津の北支駐屯軍になされ、1936年2月中旬に泉が単独で京城を出発して大連経由で天津、北京に赴いて小五台山の調査に取り掛かったという。そして北京（南苑）-包頭間の飛行機に便乗して長城線を越え、小五台山を目視で確認して、涿県城上空を通過したことで位置を定め、飛行機の高度3000メートルから小五台山の高度を2800～3400、3500メートル程度と割り出した<sup>34</sup>。泉が3月1日付書信に飛行機便乗のことを、天津からの3月4日付書信に標高のことを記した<sup>35</sup>ということから、泉は1936年3月1～4日のあいだに飛行機からの調査を行ったとみられる。

そして1937年から外務省との交渉が開始されたが、時期尚早とのことで延期され、1938年に決行となったとのことである。

1938年3月には竹中要と泉靖一による現地予備調査が行われた。その様子が雑誌『朝鮮及満洲』に「北支漫歩」として掲載されている。それによると、3月の調査の目的は「城大山岳部で多年計画の北支小五台山並五台山の登攀並研究旅行の下調査<sup>36</sup>」であった。彼は京城から奉天経由で北京に入り、「[3月]27日は先づ東単三条胡同にある大毎〔大阪毎日新聞支局〕を訪問して、支局長の金子さんに会って打合せをなし、支局次長の関さんの案内で、〇〇部隊を訪ねて小五台山並五台山計画を相談した<sup>37</sup>」という。ここで出てくる支局長の金子とは金子秀三（1900～1980年、1924年大阪毎日新聞社入社、戦後毎日新聞社退社後はRKB毎日放送社長<sup>38</sup>）のことであり、1933年4月に大連支局長に、1937年2月に北京支局長に就任した人物である<sup>39</sup>。竹中らが華北での軍当局との折衝に大阪毎日新聞とのコネクションから接近していることがわかる。

〇〇部隊の訪問の後、竹中は「帰路大毎支局の近くで本日開業したばかりのレストランに入って中食を摂つてゐる時、元京城の大毎支局に居た池田氏」に会っている<sup>40</sup>。これから竹中と大阪毎日新聞の関係が京城で形成された可能性がうかがえる。

大阪毎日新聞が竹中らの活動を支援した背景は現時点ではまだ明らかでないが、大阪毎日新聞社は大学山岳部の活動について、立教大学山岳部ナンダコート初登頂を後援していた<sup>41</sup>ことから、大学山岳部の活動支援に積極的であったのであろう。また日中戦争の戦跡について、東京本社学芸部長久米正雄をはじめ、深田久弥、北村小松らの文壇部隊が旅行して、ル

ポを紙面に載せた<sup>42</sup>ことから、戦跡報道を知識人に任せることも珍しいことではなかったとみられる。事実、蒙疆学術調査団の途中から団長になった京城帝国大学教授の鈴木武雄は調査終了後、ルポを『大阪毎日新聞』に連載している。こうしたことから山岳部ないし竹中は1937年以前から大阪毎日新聞と接点があり、1938年3月の華北での予備調査段階から軍当局の紹介など少なからぬ協力を得ていたといえよう。

以上のことを整理すると、1938年の蒙疆学術探検隊に合流する三つの流れは、1920年代の北伐、1931年の満洲事変以降にそれぞれ強化されていた。京城帝国大学の漢薬研究と満蒙文化研究が東方文化事業の助成を受けており、山岳部の活動に大阪毎日新聞の支援を受けていたことが注目される。

## 4 派遣の背景 京城帝国大学を取り巻くもの

### 4.1 占領地における軍政および傀儡政権

ここでは、調査団派遣に関する京城帝国大学以外の要因について検討する。第一に検討するのは張家口方面に展開した日本軍の軍政および傀儡政権との協力の有無である。前述のように1934年から張家口では秘密裡に日本軍の特務機関が活動しており、盧溝橋事件後の1937年8月には関東軍が張家口を占領していた。かれらの調査状況をうかがわせる資料が、(京城帝大の蔵書を継承した)ソウル大学中央図書館古文庫に所蔵されている。それは1938年6月時点の張家口特務機関の調査資料である「主要物資集散流動要図」(蓮沼兵団参謀部・張家口特務機関作成)<sup>43</sup>である。それには主要な物資の流通が山西省を中心に記述されており、モンゴル高原の情報がごく少数である。特務機関からモンゴル高原の情報に対する調査ニーズがあった可能性がある。実際の終戦までのモンゴル高原方面の軍事関係の調査は善隣協会調査部が請け負うことがあったという都竹甲子雄の証言がある<sup>44</sup>。また「蒙疆」では1939年夏には東京工業大学の学生らによる鉱物資源調査が行われており<sup>45</sup>、1939年7月～9月に東京商科大学の学生らによる統計資料整備が行われている。東京商大の調査に加わった勝海二郎は次のような証言を残している。



「向うに着いたら政府の指示に従って各地にバラ撒かれ、そこで統計資料整備の手伝いをする。そこで統計資料整備の手伝いをする。期間は八月一杯。その間日当5円が支給される。蒙古政府は統計資料整備の為に夏休み中の学生諸君の協力を必要としている。希望者は申し出る様に」。学生課からの話は大意この様なものでした。一日5円なら月150円、これだけあれば往復の旅費は勿論のこと帰りには北支、満州旅行も出来るだろう。足りなくなったらなっただで行く先々の先輩が何とかして呉れるだろう。こんな気持ちで集まったのが私をいれて11人ありました。学生課から「東京商科大学太平洋クラブ蒙疆視察団」と名をつけて貰い昭和14年7月9日、神戸から大阪商船の「うる丸」に乗りこみました。懐中には厚和迄の旅費と僅かな小遣いが入っていただけでした。(略)今にして思えば、蒙古政府が高い日当を出して我々学生を招いたのは、学生のアルバイトを必要としたというよりは、内地に対する蒙古政府のPRと、大学卒業生を蒙古に誘引する為のプロパガンダの方に重点があったのではなかったのかと思います。私と豊鎮で起居を共にした山下敬一郎君は、卒業後大同炭礦に入社されました<sup>46</sup>。

これら東京商大、東工大のケースは、蒙古政府がアルバイト学生を求めたことがあきらかなパターンである。勝海は「蒙疆」政府による学生のリクルートも目的であったのでは無いかとも推測している。現地政府が京城帝大の調査団を受け入れた背景にはこうした流れもあるのかもしれない。ただし京城帝大が現地政権にどのようなデータを提供したのかは、現時点では不明である。

こうした学生チームとは別に、「蒙疆」の政府は、東京や京都の東洋学者の現地調査も受け入れている。「蒙疆」政府（より正確には晋北自治政府）は1938年から1944年までの毎年、東方文化研究所（京都）の水野精一らによる雲崗石窟の調査団を受け入れている<sup>47</sup>。その1938年の第一回雲崗調査では水野とならんで東方文化研究所で雲崗石窟研究の主要メンバーであった長廣敏雄に対して、治安維持法関係の嫌疑で許可が降りないなど、

派遣前に日本側で官憲による選別が行われていた<sup>48</sup>。1939年には東京帝国大学の原田淑人らによる北魏遺跡の方山発掘の実績も確認できる<sup>49</sup>。

こうした日本の各大学の調査はすべて分野別（理系文系にわかれる）の調査活動であり、京城帝大の文理融合的な調査とは対照的であることも指摘できよう。

## 4.2 朝鮮総督府と「蒙疆」との関係

次にみておきたいのは朝鮮総督府と「蒙疆」との関係である。第一に朝鮮と蒙疆の経済的關係を確認しておきたい。朝鮮総督府は盧溝橋事件以後、華北との貿易關係の強化につとめており、朝鮮の地理的優越性を活用し内地品の中継地、朝鮮産品の輸出振興が期待されていた<sup>50</sup>。そして1938年5月には張家口に総督府の出張所を新設することが決まっております<sup>51</sup>、その目的は朝鮮総督府当局での経済的、文化的、鮮支提携策を実現する足場を華北に求めるため<sup>52</sup>であった。朝鮮総督府は「蒙疆」政權との關係強化を志向していたといえる。それはその後も実を結んでおり、朝鮮総督府は「蒙疆」管内で朝鮮の物産見本市を開催した。たとえば1939年5月から6月にかけて「北支蒙疆綜合見本市即売会」を朝鮮総督府は天津、北京、張家口、厚和、包頭で開催した<sup>53</sup>。

ただし泉は朝鮮総督府出張所の關係に「仕事の実際的な点においては何ら益するところなし」、と批判的であり（前述の泉靖一フィールドノート史料1938年7月）、調査団の活動と出張所は直接的な關係はなかったもようである。朝鮮総督府学務局長塩原時三郎は大阪毎日新聞に対して「目下各部門にわたり日本の權威者が熱心な研究をおこなってゐるが帝国大陸政策の前進基地たる半島が北支を認識することはより重大である」と談話を寄せ<sup>54</sup>、彼はさらに6月4日に京城クラブで舉行された調査団の結団式において「今回の城大の壮挙は建設工作に多大の基礎的資料をもたらすものとして大いに期待する、またこの企てはこれ一回きりでなく今後何回も決行されて研究を続行されんことを望む」と激励スピーチを行った<sup>55</sup>。大学の調査団の事業が關係強化の第一歩として期待されていたということであろうが、総督府は基礎資料の充實を求める程度であったともいえるであろう。

朝鮮総督府が関わった理由として、蒙疆在留朝鮮人の可能性はどうだろうか。張家口領事館内の朝鮮人の人口を（表4）に整理してみた。

表4 張家口領事館関係の人口<sup>56</sup>

	領事館所轄別	「内地人」	朝鮮人	台湾人	計
1937.1	張家口	672	45	1	718
1940.1	旧張家口（張家口、大同、厚和、包頭）	26151	3082	35	29268

この表によると朝鮮人は1937年から1940年近くにかけて3000人ほど増えている。朝鮮人の職業は雑貨業、料理業が多かったとみられる。朝鮮総督府北京出張所による次の分析をみてみよう。

朝鮮人経営ノ事業中最モ多キハ比較的回収率早キ料理店、飲食店、カフェー、雑貨商等ニシテ特ニ第一線方面ニ進出シテ料理店ヲ経営スル者極メテ多ク、此ノ方面ニ於テハ相当ノ活躍ヲ為シツツアルモ、之レハ何レモ主トシテ軍人、軍属ヲ顧客トスル關係上軍ノ移動ト共ニ移動シ<sup>57</sup>。

この資料によると、華北の朝鮮人については日本軍移動との関係ありとの分析が当時からあった。また、アヘン関係の事業を営んだ朝鮮人は満洲国の勧誘で張家口方面へ誘導されたという情報もある<sup>58</sup>。ただし泉の日記には現地朝鮮人はほとんど登場しない。

こうしたことを考えると、朝鮮総督府高官は、送り出し時に蒙疆と朝鮮の関係を深めるためのイベントとして京城帝大調査団に期待のメッセージを出してはいるものの、張家口現地の朝鮮総督府出張所や朝鮮人と泉らは特に関係をもたなかったといえるのではないであろうか。

## おわりに

以上のように近年利用可能になった資料、公文書や新聞復刻版、個人アーカイブの史料をもちいて京城帝国大学蒙疆学術探検隊の派遣背景を探っ

てみた。

個人資料をみると、軍のなかでも調査団に対する姿勢は濃淡があり、軍のなかには泉らを現地宣撫工作に役立てようという考えの持ち主がいたこと、泉の第一の目的は小五台山であって、モンゴル高原ではなかったことがうかがえる。

1938年京城帝国大学調査団には満蒙文化研究会、山岳部、漢薬研究の系譜が合流しているとみられ、京城帝国大学本体の予算のほか、外務省の東方文化事業、大阪毎日新聞社が重要な資金源であった。また、京城帝国大学の調査団はほかの大学に比べると文理融合的な特徴があった。

朝鮮総督府が「蒙疆」との関係強化を目指す動きは、京城帝大調査団の派遣にプラスに作用した。ただし派遣時には朝鮮総督府高官レベルで両者の関係向上に期待する言説があるが、現地での顕著な協力関係は確認できなかった。この調査団の背景には文理融合、学生研修旅行、外部資金、研究データの課題など、現代日本の大学をめぐる問題を想起させるものもあったのが印象的である。本論では1938年調査団の準備過程で紙幅が尽きてしまったので、個別の調査班の動向や成果については今後の課題としたい。

---

註

- 1 代表的なものとして日本では馬越（1995）、通堂（2008）永島（2011）、松田・酒井（2014）、李曉辰（2016）、などがあり、韓国では정근식（2011）、윤해동・정준영（2018）などがある。
- 2 永島（2019）がその文献を用いている。
- 3 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:B05015692800、本邦人満支視察旅行関係雑件／補助実施関係 第九卷(H-6-1-0-3\_2\_009)(外務省外交史料館)。
- 4 泉靖一「南支を観て」が『朝鮮及満洲』の362号（1938年1月）、364号（1938年3月）、365号（1938年4月）、366号（1938年5月号）に分けて掲載されている。
- 5 「遙かな山々」として『アルプ』1967年8月から1970年6月まで掲載。それをまとめたのが泉（1971）である。
- 6 60頁には西岡圭司・編集長から「本特集の編集作業では、泉靖一先生のご長男、泉拓良先生（京都大学特定教授）には、フィールド・ノートや写真の提供をはじめ多大なる協力を賜りました」、とある。

- 7 京城帝国大学に勤務していた河野六郎は引き揚げ時に資料をほとんどおいてきている。菅野裕臣が徳永康元から聞いたことによれば、河野の著書の『朝鮮方言学試攷』が終戦直前に刊行され、京城帝国大学の研究室に積まれていたが、日本に持ち込まれたのは一時期まで3冊だけであったという（菅野裕臣「東京外大と徳永康元先生」<http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi?autobio/autobio-2.html> 2020/02/13 閲覧）。
- 8 学習院大学東洋文化研究所が所蔵する末松保和資料には戦前から末松が継続して所有したとみられる調査資料が2件しかない。1938年と1940年の手帳だけである（李正勲・長澤裕子・吉田愛・橋本陽『調査研究報告 56 学習院大学東洋文化研究所所蔵資料紹介 末松保和資料』2012年、17頁）。目録には戦前の前問恭作あて書簡、小倉進平からの書簡があるが、それらは戦後になって末松自身が前問家や小倉家所蔵の書簡を複写するなどして再収集したものである。
- 9 櫻井義之「戦後城大同窓会再建の動き一同窓会前史」京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編（1974）、532～533頁。
- 10 飯山（1962）、196～199頁。
- 11 泉（1971）、215～221頁。
- 12 張家口の西北研究所に1944年5月～1945年8月にいた梅棹忠夫は、モンゴル調査資料を北京経由で合法的に持ち出せた（梅棹、1991、118～119頁）。
- 13 ただし1945年8月以降の京城帝国大学は組織的な留用は行われず、泉らは京城日本人世話会や移動医療局の業務に従事していた（泉、1971、215頁）。
- 14 全京秀（2013a）、126頁。
- 15 内田・柴田（2007）、42～46頁。
- 16 前掲「10. 京城帝大教授 尾高朝雄外十一名 昭和十三年六月」『本邦人滿支視察旅行関係雑件／補助実施関係 第九巻』に収録されている。
- 17 「権威者に聴く蒙疆最近の姿」『大阪毎日新聞』朝鮮版A、1938年10月17日。
- 18 泉靖一『1938.7.9-蒙疆調査』国立民族学博物館泉靖一アーカイブ所蔵No.1159
- 19 泉靖一『1938.7.9-蒙疆調査』国立民族学博物館泉靖一アーカイブ所蔵No.1159
- 20 泉靖一『1938.7.9-蒙疆調査』国立民族学博物館泉靖一アーカイブ所蔵No.1159
- 21 長廣敏雄『雲崗日記：大戦中の仏教石窟調査』NHKブックス、1988年、14頁。
- 22 懐蒼健（2016）、100～106頁。
- 23 熊本（2013）、194～195頁。
- 24 加来天民「バキュムエバポレーター」京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編（1974）、611頁。杉原徳行も同様の回想を残している。
- 25 「大陸文化研究会」京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編（1974）、311～312頁。
- 26 「滿蒙文化研究会名称変更」『大阪毎日新聞』朝鮮版A、1938年6月2日。
- 27 藤本（1994）、144～145頁。
- 28 「大陸人類学の研究—城大の今村博士あす滿蒙へ」『京城日報』、1938年7月20日朝刊。
- 29 永島（2019）、5～6頁。
- 30 服部・三浦（1974）、587～588頁。
- 31 中生（2014）、257～258頁。
- 32 飯山（1979）、27頁。
- 33 泉靖一「小五台山遠征」『ケルン』60、1938年、73頁。竹中要も同様の証言を残し

- ている（竹中要「小五台山登攀」『山岳』34年2号、1939年、109～110頁）。
- 34 泉靖一「小五台山遠征」『ケルン』60、1938年、74頁。
  - 35 泉靖一「小五台山遠征」『ケルン』60、1938年、74頁。
  - 36 竹中要「北支漫歩」『朝鮮及滿洲』366、1938年、51頁。
  - 37 竹中要「北支漫歩」『朝鮮及滿洲』367、1938年、57頁。
  - 38 『朝日新聞』東京版、1980年9月22日朝刊。
  - 39 『毎日新聞百年史』毎日新聞社、1972年、601、603頁。
  - 40 竹中要「北支漫歩」『朝鮮及滿洲』367、1938年、57頁。
  - 41 『毎日新聞百年史』毎日新聞社、1972年、603頁。
  - 42 『毎日新聞百年史』毎日新聞社、1972年、188頁。
  - 43 ソウル大学中央図書館古文獻室所蔵『（北支及蒙疆地方主要物資）集散流動要因』（請求記号4810- 342）
  - 44 都竹（1975）、399頁。
  - 45 「学徒の蒙疆鉅産資源調査」『蒙古』87、1939年、175頁。
  - 46 勝海二郎「豊鎮と私」『思出の内蒙古』らくだ会、1975年、202～204頁。
  - 47 岡村秀典『雲崗石窟の考古学』臨川書店、2017年、29～32頁。
  - 48 長廣敏雄『雲崗日記：大戦中の仏教石窟調査』NHKブックス、1988年、14、31頁。
  - 49 「北魏文化の古蹟「方山」」『蒙古』87、1939年、176頁。
  - 50 工藤三太郎「事変後の中北支経済と朝鮮貿易の将来」『朝鮮』276、1938年、26頁。
  - 51 「北京及び張家口に本府出張所を新設す」『京城日報』、1938年5月31日夕刊。
  - 52 「近く張家口に派遣員を設置」『大阪毎日新聞』朝鮮版A、1938年5月29日。
  - 53 「北支蒙疆見本市 朝鮮總督府が開催」『蒙古』84、1939年、203頁。
  - 54 「目的貫徹を望む一塩原学務局長談」『大阪毎日新聞』朝鮮版A、1938年6月2日。
  - 55 「内蒙踏査の探検隊員きまる一隊長は尾高博士、一行十七名晴れの結団式挙行」『大阪毎日新聞』朝鮮版A、1938年6月7日。
  - 56 1937年は「中華民國在留邦人人口領事館管内別概計表」『昭和12年1月1日現在 滿洲国及中華民國在留邦人人口概計表』（東亜局第二課）（木村健二・幸野保典解題『戦前期中国在留日本人統計』第七卷、不二出版、2004年）、1940年は「領事館管内別在留邦人人口」『中華民國在留本邦人及第三国人口概計表 附滿洲国在留本邦人人口 昭和15年1月1日現在』（外務省東亜局第三課）（木村健二・幸野保典解題『戦前期中国在留日本人統計』第八卷、不二出版、2004年）。
  - 57 『昭和16年6月 在北支朝鮮人概況』（朝鮮總督府北京出張所）、38頁（강대민, 민경준, 김명규編『침략전쟁시기 재중·재만조선인 개황 자료』2、景仁文化社、2013年所収）。
  - 58 山田（2002）、891頁。

---

## 参考文献

### 日本語

- 防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』1、朝雲出版社、1968年。  
全京秀著、宮原葉子訳「京城帝国大学の学術調査と「京城学派」の誕生：人類学分野にフ

- ォーカスを合わせて』『朝鮮学報』214、2010年。
- 全京秀著、李徳雨訳「泉靖一のニューギニア調査と軍属人類学 大東亜戦争と学問」『国際常民文化研究叢書 第4巻 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学』神奈川県国際常民文化研究機構、2013年a。
- 全京秀著「京城学派の人骨研究と戦時人類学：今村豊の南柯一夢(?)と絆」酒井哲哉・松田利彦編『帝国と高等教育：東アジアの文脈から』国際日本文化研究センター、2013年b。
- 藤本英夫『泉靖一伝：アンデスから濟州島へ』平凡社、1994年。
- 服部敏・三浦理平編「城大山の会 行事年表」(『紺碧遙かに』1974年)。
- 広川佐保「蒙地奉上：「満州国」の土地政策」汲古書院、2005年。
- 李曉辰『京城帝国大学の韓国儒教研究』勉誠出版、2016年
- 飯山達雄『バガボンド12万キロ』富山房、1962年。
- 飯山達雄『遙かなる中国大陸写真集1 満洲・蒙古の大地』国書刊行会、1979年。
- 泉靖一『遙かな山やま』新潮社、1971年。
- 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編『紺碧遙かに：京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会、1974年。
- 京城帝国大学大陸文化研究会編『蒙疆の自然と文化：京城帝国大学蒙疆學術探検隊報告書』古今書院、1939年。
- 『季刊民族学』154、2015年10月。
- 熊本史雄『大戦間期の対中国文化外交：外務省記録にみる政策決定過程』吉川弘文館、2013年。
- 永島広紀『戦時朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』ゆまに書房、2011年。
- 永島広紀「蒙疆の「探検」と京城帝国大学：京城帝大「大陸資源科学研究所」設置に関する予備的考察」『韓国朝鮮文化研究』19、2019年。
- 中生勝美「梅棹忠夫の山岳部ネットワーク」ヨーゼフ・クライナー編『日本とはなにか 日本民族学の二〇世紀』東京堂出版、2014年。
- 中生勝美『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』風響社、2016年。
- らくだ会本部『思出の内モンゴ』同会本部、1975年。
- 酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014年。
- 慎蒼健「フィールドと実験室科学の接合」坂野徹編『帝国を調べる：植民地フィールドワークの科学史』勁草書房、2016年。
- 鈴木仁麗『満州国と内モンゴル：満蒙政策から興安省統治へ』明石書店、2012年。
- 通堂あゆみ「京城帝国大学法文学部の再検討：法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に」『史学雑誌』117(2)、2008年。
- 都竹武年雄「住めば都ぞゴビの里」(『思出の内モンゴ』1975年)。
- 内田知行・柴田善雅編著『日本の蒙疆占領：1937-1945』研文出版、2007年。
- 馬越徹『韓国近代大学の成立と展開』名古屋大学出版会、1995年、
- 梅棹忠夫『回想のモンゴル』中公文庫、1991年。
- 山田豪一『満州国の阿片専売：「わが満蒙の特殊権益」の研究』汲古書院、2002年。

韓国語

윤해동・정준영編 『경성제국대학과 동양학 연구』 선인, 2018年。

전경수 『이즈미 세이이치와 군속인류학 : 뉴기니 조사를 중심으로』 서울대학교출판문화원, 2015年。

정근식ほか 『식민권력과 근대지식 : 경성제국대학 연구』 서울대학교출판문화원, 2011年。

中国語

中央档案館・中国第二歴史档案館・吉林省社会科学院編 『汪偽政權』中華書局、2004年。

本研究はJSPS 科研費 JP18KK0018 の助成を受けたものです。

(都市イノベーション研究院・准教授)



# The 1938 Keijo Imperial University Expedition to Inner Mongolia

TSUJI Yamato

Keijo Imperial University, established in 1924 during the Japanese colonization of Korea, sent four expedition teams to Inner Mongolia from 1938 to 1945. The purpose of these expeditions is not known, but this article examines the background to the first expedition as shown in government records from the Japan Center for Asian Historical Records, the National Archives of Japan, newspapers from the period, and IZUMI Seiichi's private field notes in the National Museum of Ethnology in Osaka. The records indicate three possible reasons for the first expedition to Inner Mongolia. First, the *Mammo Bunka Kenkyukai* academic community was established in 1933 to study the culture of Manchuria and Mongolia. Second, there was a great interest in botanical research, especially medicinal herbs, and funding was provided by the Asian Affairs Bureau of the Japanese Ministry of Foreign Affairs. The third and main reason was that the alpine club at the university had a strong interest in climbing *Xiao Wu Tai Mountain*(小五台山), and an expedition plan was formulated by TAKENAKA Yo and IZUMI Seiichi in 1935. The mission was sponsored by *Osaka Mainichi Shimbun*, which was the second largest media group in Japan at the time; however, security in Inner Mongolia could not be guaranteed, and the climbers changed their target to the Mongolian highlands.